

皮膚科学・形成外科学

【単位数: 1単位, 授業19コマ, 予備2コマ(定期試験含まず)】

当該科目は医師としての臨床経験を持つ教員が担当する授業科目である。

1 科目責任者

渡邊大輔 教授(皮膚科学)

科目担当者

古川洋志 教授(形成外科)

2 教育目標

(1) ねらい(Ⅲ-3-b, Ⅲ-4-b, Ⅲ-5-b)

- ① それぞれの皮膚疾患、形成外科疾患の病因・病態を理解し、それを元に検査方法や治療法を理解する。
- ② 皮膚病変から全身疾患や内臓病変の存在を推測し、さらに必要な検査や治療の方向性を決めることできる。

(2) 学修目標

- ① 正常皮膚の構造と機能を説明できる。
- ② 原発疹、続発疹が説明できる。
- ③ 皮膚検査法(硝子圧法、皮膚描記法、KOH直接検鏡法、Tzanck試験、ダーモスコピ一)について説明できる。
- ④ 皮膚アレルギー検査法(プリックテスト、パッチテスト)を説明できる。
- ⑤ 水疱症、膿疱症、角化症など代表的な皮膚疾患について、病因・病態・治療について説明できる。
- ⑥ 皮膚感染症(細菌、真菌、ウイルス)について病原菌と症候について説明できる。
- ⑦ 外傷、熱傷の正しい診断と初期治療、褥瘡の発生原因と予防・治療を熟知する。
- ⑧ 先天異常、腫瘍などの体表面の疾患に対して、整容と機能の回復を目指した形成外科・再建外科の治療法を理解する。
- ⑨ 体表面のコンツールの再建手術や、抗加齢医療・美容外科について知る。

3 成績の判定・評価

(1) 総合成績の対象と算出法

皮膚科学分野、形成外科学分野共通:

	成績対象	割合	方法・コメント
定期試験	○	80%	小テストと合わせて100点満点とし、60点以上を合格とする。 記述問題や多肢選択問題がある。
小テスト	○	20%	講義の一部で出席と授業での理解度確認のため行う。
その他	○	—	受講態度が不良の場合は、10%を限度に減点する。

出席: 定期試験を受験するためには欠席率が3分の1を超えてはならない。

(2) 合格基準

皮膚科学分野、形成外科学分野それぞれについて、評価対象の合計が60%以上(又は60点以上)で合格とする。

(3) 再試験・再評価の方法

皮膚科学分野、形成外科分野それぞれの評価対象の合計が60%未満の場合は、分野ごとに再試験を実施する。再試験は定期試験に準ずる方法で実施する(60%以上で合格)。再試験は皮膚科学分野40分、形成外科分野30分で実施する。

(4) 課題（試験やレポート）へのフィードバック

定期試験を採点し、合否を出し、定期試験が不合格になった者は定期試験、講義資料をもう一度見直し、さらに学習し再試験に備える。小テストは、講義で解説する。

4 教科書

書名	著者名	出版社	教科書として指定する理由
『あたらしい皮膚科学』	清水 宏	中山書店	皮膚科学の基本的な事柄が網羅されている。
『標準皮膚学』	岩月 啓 監修	医学書院	皮膚科学の基本的な事柄が網羅されている。
STANDARD TEXTBOOK 標準形成外科学 第7版	泰 維郎 他編	医学書院	形成外科の基本的な事柄が網羅されている。

5 参考図書

書名	著者名	出版社	参考図書とする理由
『最新皮膚科学大系』	玉置邦彦総編集	中山書店	より専門的な知識が必要な場合
『Histopathology of the skin』	David Elder他	Lippincott-Raven	皮膚病理学の知見が網羅されている。
TEXTシリーズTEXT形成外科学 第3版	波利井清紀 監修	南山堂	形成外科の基本的な事柄が網羅されている。
熱傷治療マニュアル	木所昭夫 編著	中外医学社	熱傷治療に必要な知見が網羅されている。

6 準備学習（予習・復習）

- 参考図書のどれかを選んで、その目次全体を眺め、どのような事項が取り上げられているのか確認しておく(1コマあたり約0.5時間)。
- 上記の中で、興味を惹いた項目について記載内容を読んでおく(1コマあたり約0.5時間)。

7 授業計画

(1) 講義の方法

基本的に大教室での知識伝達型の講義であるが、講義中、一部、小グループ討論や講師との質疑応答などのアクティブ・ラーニングを導入する。

(2) 講義の内容

1コマ目に総論として皮膚科学の基礎を解説し、2コマ目以降は、様々な皮膚疾患を分野ごとに解説し、概念理解を進めていく。